

# 日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	永井 泉 (18)
『太平記』引用説話の典拠と文脈	
——英訳『太平記』の注記を端緒として	大坪 亮介 (32)
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	
——『玉書』の受容から見る東西意識	劉 娟 左 (31)
芥川龍之介「秋山図」など	
——世界文学としての芥川作品	奥野 久美子 左 (18)
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	高島 葉子 左 (1)
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

# Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka ..... 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi ..... 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke ..... 32

*Waka* and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko ..... 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN ..... left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko ..... left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko ..... left 1

**Urban-Culture Research Center,  
Graduate School of Literature and Human Sciences,  
Osaka City University**

## 世界文学と「地方」

野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』

堀まどか

(要約文)

時代や民族の制約を超越し融合する「世界文学」の理念には、「地方」性や「ネイション」(国家、国民、民族)との対照的關係が含まれる。本稿では、一九一二年から刊行されたシカゴの詩雑誌『ポエトリ』の成立と編集方針に注目し、編集者ハリエツト・モンローが東洋詩の存在を評価しながら、「新しい詩」運動を切り拓こうとしていた点について論じる。同時に、野口米次郎が『ポエトリ』やシカゴ詩学派を日本詩壇に説明する際に、地方性と国際性の両立の重要性やホイットマンの宇宙意識によって世界的をめざす点を強調していた点を検討した。

### はじめに (世界文学について)

一九世紀、詩人ゲーテが「世界文学 (Weltliterature / ヴェルトリテラトゥア)」という言葉を用い、以後、「世界文学」という言葉や概念、理念や意義は各国でさまざまに議論されてきた。国民文学を確立することの重要性と意義が意識された時代であり、同時にその時代や民族の制約を超越し融合す

る存在としての「世界文学」の理念が注目された。ゲーテは、各国の文学を翻訳して相互に読み合うことで、世界主義的な (コスモポリタンの) 文明を作り出す手段になると考え、(国民の内部に存在する様々な意見の違いが、他の国民の見解や判断によって補正されること) によって生まれる『』ものが、世界文学だと考えた。ゲーテが東洋 (ペルシアやインドや中国) にも関心を持っていたことは事実だが、ただしドイツ人

のゲーテにとっての「世界文学」が、「ヨーロッパ文学」の範疇であったのも事実である<sup>53</sup>。フランスやイタリアが意識され受け入れられるなかで、普遍的な「世界文学」が立ち上がってくる、といった観点でゲーテの論理は示された。その後、「世界文学」に関する議論がそれぞれの地域で国民文学や民衆文学との対峙のなかで模索されたことは、いうまでもない。

では、「世界文学」と「地方」の相関関係はどのようなものだと考えられるだろうか。現代の比較文学者ダムロッシュ（二〇〇三）は、「世界文学」の概念を、翻訳であれ原語であれ発祥文化を超えて流通する文学作品だと論じ、多文化的であるだけでなく「他事的」でもある、と説いている<sup>54</sup>。また、世界文学を「地方の特色を帯びながら、地方に縛られずに動きうる」<sup>55</sup>ものとしている。世界文学は「地方ならではのニュアンスで色づけられたコスモポリタニズムに密接にかかわっている」<sup>56</sup>し、「誰一人として、どこにも属さないという意味でのコスモポリタンではないし、コスモポリタンになることもできない」<sup>57</sup>と、「地方」と「世界文学」の密接な関係を論じている。

つまり、世界文学は、国民文学や戦争や時代イデオロギーを超えていくもの、という意味で希求されたのだが、国民文学との対の概念で、また国民文学を形成し位置付けを理解するためにも、そのような世界の文学という概念が生まれたと

いってよい。

では、日本の文学はそのような「世界文学」のなかでいかに位置づけられるのか。現在、日本文学は、ニューエンサイクロペディア・ブリタニカのなかでも、世界で「世界の主要な文学の一つ（Japanese Literature ranks as one of the major literatures of the world）」<sup>58</sup>と位置づけられている。

日本文学作品のいくつかが、世界文学の地位にあると断言しても否定する者はいないだろう。しかし、日本文学が「主要な文学」だと認識され、「世界文学」として世界各地で読まれるようになった経緯に、野口米次郎という日本の詩人が無関係ではなかったことは、あまり知られていない。

たとえば、現在、世界中で「ハイク」としてかなりの知名度をもつ俳句は、一九世紀末の外国人日本研究者たちのあいだでは評価が低かった。一八八九年から東京帝国大学で教壇に立ったドイツ人のカール・フロレンツ（1865-1939）は、「俳句のように短いものは「殆ど日本詩界を壟断せる日本文学の一大災厄」であり、俳句のごとき「簡短に過ぐる詩形は、詩人をして其想を顯はすに充分なる餘地を與ふるものにあらず、却て之をして萎縮せしむるや必然なり」と考えていた<sup>59</sup>。そして、「世界列強の間に光榮ある地位を得た」日本の文学が「世界文學の壇上に於て極めて微賤なる位地を保ちたるに過ぎないことは嘆かわしいことであると述べていた<sup>60</sup>。俳

句のような極度に短い詩型は、世界文学として通用しないと考えていたのは、フロレンツだけでなく、このような日本の短詩の伝統に対する戸惑いや低い評価は、当時の西欧の日本紹介者たちに共通する見解であった。日本と西欧の詩歌観の違いによって、日本詩歌における詩形の短さや韻律の単純さ、また扱われる主題は、彼らが「詩的」と感じているものの欠落・不足とみなされたのである<sup>24</sup>。

そのような中、二十世紀転換期に「東洋」や「日本」という地方の文学への関心が高まり、世界文学へのさらなる関心が生まれていく。野口は一八九六年に詩人としてアメリカでデビューして以降、俳句や能や浮世絵を中心にして当時のモダニズム文化人らに影響を与え、また日本にその思想をもたらしたことが知られている。

本稿では、この野口米次郎とモダニズム詩歌を胎動させたシカゴの詩雑誌『ポエトリ』*The Poetry: A Magazine of Verse*を中心に、「世界文学」と「地方」の関係を考えてみたい。じつは近代日本とシカゴとの関係は、文学関連のみならず、日本製品の輸出入、銀行などの金融関係の連携、美術品や骨董品、茶や生糸の輸出、そして一九二〇年代には野球の交流などが行われて、思いのほか深いものがある。この二つの「地方」には、サンフランシスコやニューヨークとの関係ほどまではないもの、言及すべき点は多いのである。ここ

では、野口米次郎とシカゴの雑誌『ポエトリ』との関係に話を絞る。野口とこの雑誌の関係については既に詳述したことがあるが、一部繰り返し点もあるが、「世界文学」という理念を中心にして再構築する。

## 1. 雑誌『ポエトリ』——アメリカの〈新しい詩〉の潮流

はじめに、ハリエット・モンロー(1860-1936)と雑誌『ポエトリ』の英米文学史における位置づけと、英詩の革新がどのような枠組みの中で起こったかという点を概観する。

一九一一年にハーヴァード大学で「ジェンティール・トラディション」(Genteel Tradition)とつまり「上品ぶった伝統」という言葉が使われ、アメリカに現実的な力と現代的文化を求め意識改革の転機が生まれた。「ジェンティール・トラディション」に反発する若い世代が、ニューヨークやシカゴやサンフランシスコなどの都市部に集中し、またロンドンやパリに移住していった。「ジェンティール」なニューイングランド文学の保守性を突き崩し、新しいアメリカ文学を胎動させようとする勢力が顕著に現れはじめたのである。そのひとつが〈新しい詩(New Poetry)〉の運動であり、その勢力の母胎となったのが、シカゴの小雑誌『ポエトリ——詩の雑誌』

*The Poetry: A Magazine of Verse* (本稿では『ポエトリ』と表記)である。

このジェンティール・トラディションという言葉が使われた一九一一年は、シカゴ大学で「世界文学」がいわれたのと同じ年である。シカゴ大学のリチャード・モウルトン(1849-1924)が、『世界文学—および一般文化におけるその位置』*World Literature and Its Place in General Culture*を刊行したのが、この年であった。(この本は日本では一九三四年に翻訳され刊行されている。)

ハリエット・モンロー主催の雑誌『ポエトリ』は、一九一二年一〇月にシカゴで創刊し、一九一〇年代のアメリカで(詩のルネサンス(poetic renaissance))と呼ばれる文学潮流を先導した。『ポエトリ』の創刊の辞には、ホイットマン(1819-1892)の「偉大な詩人たちには、偉大な読者聴衆もまた必要なのである (To have great poets, there must be great audiences too)」の短いフレーズが掲げられていた。ホイットマンの理念と思想が、この雑誌の中核にあることは注目しておきたい。

モンローは一九一二年八月から九月初めにかけて、英米の五〇人以上の詩人たちに新しい雑誌を創刊する意図を書いて、支持と参加を呼びかけた。雑誌創刊の主旨は、大衆雑誌の制限に強いられることなく、詩人が自らの位置を確認する

場所を提供したいということであった。既存の雑誌は、詩歌に深い関心のない公衆(読者)が対象であるが、本雑誌は、詩を芸術としての最も崇高なものと捉え、詩歌を完成した人間の真と美の表現の最たるものとして考えている読者を対象にする、としていた<sup>23</sup>。多くの詩人が賛同し、当時はまだ無名だったエズラ・パウンドもモンローに熱烈な手紙を書いて、この雑誌の海外特派員、つまりロンドンの詩壇状況を発信する窓口となった。パウンドは自分自身の詩歌や自分の推奨するイマジストたちの詩歌をモンローに次々と送って『ポエトリ』への掲載を求めた。パウンドが革新を遂げつつある英国の状況を紹介したことは、(新しい詩)の動きを躍動させ、雑誌『ポエトリ』の活性化に大いに貢献した。この一九一二年から一七、一八年頃は、シカゴの(詩のルネサンス)期となる。

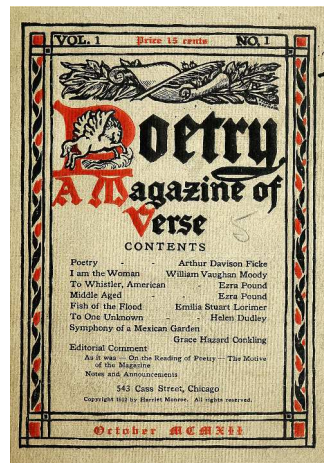
ただし一九一七年頃には、パウンドと編集部との間の不協和音が表面化する。パウンドは自らが推すイマジズム運動<sup>24</sup>の活躍の場を雑誌『ポエトリ』に求めていた。既に故国アメリカを離れてロンドンでウィリアム・バトラー・イエイツ宅に寄寓していたパウンドにとっては、アメリカ詩壇の動向やアメリカの地方性には関心がなかった。紙面がアメリカ西部の若い詩人のために奪われることに不満を示して、ハリエット・モンローらの編集に抗議しはじめた。

一方、編集者モンローの編集方針は、派閥に束縛されず良  
い詩に（門戸開放）するということであり、また雑誌運営に  
はバランスが求められていた。『ポエトリ』は、（ジェンテ  
イル・トラディション）を擁護したいシカゴの資産家たち  
や実業界をパトロンのしており、また同時に、（ジェンテイ  
ール）を乗り越えたい中西部に根ざす若い詩人たちや女性詩  
人を紹介する意図もあった。

モンローに反発したパウンドは一七年七月に『ポエトリ』  
の海外特派員を退いて、今度は別のアメリカの小雑誌『リト  
ル・レビュー』の海外特派員となって『ポエトリ』攻撃を  
展開しはじめた。パウンドはロンドンの『イングリッシュ・  
レビュー』の一九一八年五月号に掲載された『ポエトリ』批  
判の文章<sup>22</sup>を、『リトル・マガジン』の一九一八年九月号の  
巻頭に長い註釈をつけて再掲載したのである。モンローはこ  
れに反論して、雑誌『ポエトリ』はロンドンに故国離脱した  
エリート（パウンドら）専属の機関誌の方向性は取らず、ア  
メリカの自立した機関誌を目指していることを表明した。そ  
して『リトル・レビュー』の編集者もハリエット・モンロー  
に同調する意見を示し、パウンドによる誹謗中傷を批判する  
立場を示した。<sup>23</sup>

ようするに、地域性を無視して国際的な前衛をひた走ろう  
とするロンドン滞在中のパウンドと、アメリカで新しい文芸

運動を盛り立てていこうとするシカゴの編集者たちとの間に  
は、確執が生まれていた。もちろん、モンロー達もアメリカ  
の地方性のみを重視していたわけではなく、英詩全体の（新  
しい詩）の方向性を求めていたのであり、シカゴ発の「世界  
文学」を模索していたのである。



（図）雑誌『ポエトリ』

モンローが支援した（地方性）を担う中西部詩人たち——た  
とえば主な詩人にはエドガー・リー・マスタートーズ（1869-1950）、  
ヴェイチェル・リンゼイ（1879-1931）、カール・サンドバーグ  
（1878-1967）らがいたが——このいわゆる（シカゴ詩学派）と呼  
ばれた詩人たちや、シカゴの（新しい詩）運動を、日本で注  
目し評価していた筆頭が野口米次郎である。野口米次郎はイ  
エイツと親しく、イエイツの自宅で若きパウンドにも顔を合  
わせていた。パウンドと多少の書簡のやりとりもしている。

ただ、野口はパウンドについてはあまり評価していなかったとみえ、距離を置いていた。パウンドよりもモンローやアメリカ在住の詩人たちとの関係を重視していたためである。

日本の詩壇においては、大正中期にイマジズムを取り上げた紹介・論評がおこなわれるようになるし、野口の英詩や英語による講演活動がイマジズム運動に少なくないインスピレーションを与えていることは事実であったが、野口自身はその紹介にはあまり関心を示していなかった。野口はイマジストの形容詞の使い方の変容やエイミー・ローウエルの詩論などを論じる中でさえも、《私はこのイマジストの運動についてはあまり深い事は知らぬ》<sup>21)</sup>と素っ気ない。(野口はパウンドをあまり評価していなかった。)野口は、周辺から牽制されながら独自路線を推進するパウンドの文学傾向よりも、地域性とのバランスを取ろうとしたシカゴの「新しい詩」運動の動向により強い関心を示していた。

野口がシカゴ詩学派をどう捉えていたかを確認する前に、ハリエット・モンローが野口をどう認識していたか、野口とともに東洋の詩歌やアジアの詩人たちが、同時代の英米詩壇の中でどのような視線で捉えられていたかをみていこう。

## 2 雑誌『ポエトリ』に紹介された〈東洋〉詩

一九一二年一〇月に創刊された雑誌『ポエトリ』には、創刊当初から東洋の息吹が導入されていた。これは一九一〇年代のアメリカ社会の混交性とアメリカ中西部の〈世界文学〉への注目と関心が明確になりつつあった中での傾向といえる。一二年の段階から『ポエトリ』では、ラビンドラナト・タゴールなどの〈東洋〉詩人や、中国古典詩歌や日本詩歌、能楽などの紹介や言及がなされた。

創刊して間もない一二月号、インドのタゴールの詩が『ギタンジャリ』<sup>22)</sup> *Gitanjali* (一二年一月刊行) から六篇紹介されており、<sup>23)</sup> ノーベル賞受賞の直前には、タゴールの英詩の出現が、詩的芸術にとって非常に重大であり《英詩のみならず世界の詩歌の歴史において注目すべき出来事である》<sup>24)</sup>と評価された。<sup>25)</sup> タゴールがもたらすものは、《鋼と機械の時代に生きるわれわれが極度に必要としている静かさを尊ぶ誓い》<sup>26)</sup>であり、《この東洋の表現の中には、これまでわれわれが得てきたものよりも、はるかに深遠な静かさ、はるかに深遠な信念がある》<sup>27)</sup>と評された。

ちなみに、タゴールにノーベル文学賞を授与させた直接的な契機は、英詩集『ギタンジャリ』の刊行だとされているが、同時代的な思想潮流の相互影響関係を考える場合には、一九



一二年にアメリカのハーヴァード大学などで行った連続講演——宇宙生命論、宇宙と個人の調和、魂の意識、万物照応の理念、そして自我の滅却と自己実現を説いた——をまとめた『サードナ——人生の実現』（一九一三年）に示された思想がより重要だった<sup>xxii</sup>。タゴールは、二〇世紀初頭の象徴主義理論や生命主義思想、東洋的な宗教哲学、また民主主義や人道主義的哲学を代表する存在として受けとめられた。

雑誌『ポエトリ』の〈東洋〉認識は、野口米次郎とも無関係ではない。一五年一月号には「日本の詩歌」と題して野口の *The Spirit of Japanese Poetry* に対する非常に詳しい書評が掲載されている<sup>xxiii</sup>。これは『ポエトリ』の編集者アリス・ヘンダーソン(1881-1949)による批評であった。少し詳しくみてみたい。

ヘンダーソンは、欧米人の〈日本詩歌に対する浅薄で瑣末(trivial)でさえあった認識〉が、野口によって深められ、認識に変化を生んだと論じていた<sup>xxiv</sup>。

日本の詩はまったく説明的ではない。その方法は完全に暗示的である。連想を呼び起こし、想像力に訴える力を持つ。些細なものではなく深遠なものである。簡潔さは、緊張感によってもたらされる。(訳文、堀) <sup>xxv</sup>

俳句が〈epigram〉とは異なる文学なのだ主張していた野口の詩の解説の要点が、ここに的確に受けとめられ、日本詩歌に対する欧米人の認識に転換が起きたことが指摘されている。また、〈考えを表現するためにホックの例を多く示してくれており、その野口の表現には無駄がまったく無い〉とも述べられている<sup>xxvi</sup>。ヘンダーソンは、野口の著述の一文を引いたのちに、次のように書いている。

このおだやかな禅の教義は、人間と自然とを二つの平行する特徴的形式として把握する。そしてその両者の間には完全な共感が支配する。日本の詩歌は〈暗示的〉だといわれるが、その言葉は、かのフランス象徴主義詩人らの場合のように、〈曖昧さ〉を意味するために使用されているのではないことがわかる。

(訳文、堀) <sup>xxvii</sup>

人間と自然が感応する一対であるという認識、またそれを表現するためのことばが的確に選択されており、単純な曖昧さではないということが述べられている。

またヘンダーソンは、〈比較詩学を研究する者にとって、野口の小さな本は、秘宝のつまった巨大な貯蔵庫への鍵になるだろう〉<sup>xxviii</sup>と、野口の著作を強く推薦した。(ちなみにこ)で《little book (小さな本)》と呼ばれているのは、*The Spirit*

of Japanese Poetry の判型が実際に小さかったためである。) その後、『ポエトリ』の一九一九年十一月号でも、ユーンニス・ティーチェンツが野口について論評して絶賛している。ティーチェンツは、一九一六年から一九一七年に中国に家にする紹介を行っていた人物である。(ちなみに一九一八年の『ポエトリ』には、アーサー・ウェイリーが中国詩を一〇篇翻訳紹介している。)

ティーチェンツは、野口の *The Spirit of Japanese Poetry* が日本の精神や思想を理解するための《扉》であり、《手引き書》であると書いた。欧米読者は、この著作に《愛情に充ち、鋭敏で、凝縮した、心がうづくほどの日本の伝統詩歌の美しさ》<sup>xxix</sup>を感じていたと評価したのである。野口の著作は、同時代の英米の詩人たちの間で重要な位置を占めていた様子がかうかえる。

野口自身の詩歌の『ポエトリ』への寄稿が見られるのは、第一次世界大戦終結後に米国各地での講演旅行を始めた時期の一九一九年十一月号以降であるが<sup>xxx</sup>、米国の詩壇では、野口の日本詩歌に関する著作が早くから注目されている。

もちろん東洋への関心が、この雑誌の最重要な傾向であったというわけではない。イマジスト詩人らの傾向が強かったのであり——イマジスト詩は、日本の俳句に大きな影響を受けて出現したのだが——そのみならず、次第に様々な英国詩壇

の面々が登場していて、W・B・イエイツやアーサー・シモンズ、ブリス・カーマンなどの野口デビュエー当時の友人たちが寄稿していた。サンドバーグやリンゼイなどのシカゴ詩学派の顔ぶれは一三年末から一四年頃の早い段階で顔を見せている。ウィッター・ビンナー(1881-1968)やアーサー・D・フイツケ(1883-1945)とつった、一九一七年には野口を頼って来日し、その後アメリカ(特に西海岸)と東洋(日本や中国)との架け橋になろうとした新人の詩人たちが出現している<sup>xxxi</sup>。(フイツケは一九一六年の『ポエトリ』に日本美術についての紹介をおこなっている。)

ハリエット・モンローは、中国や日本をふくめて世界の文学潮流を重視していた。アメリカの混沌とした文壇状況にあったといえる一地方都市のシカゴの詩雑誌が、東洋への関心という点や、英詩革命への関心という点においては、英国詩壇にも決して劣らない先端的な傾向を示していたといえる。

### 3 ハリエット・モンローの捉える〈東洋〉と野口

ではハリエット・モンローは、野口をどのように評価し位置づけていたのか。ここで、『ポエトリ』を編集するハリエット・モンローとアリス・ヘンダーソンが編纂し、一九一七

年二月に刊行されたアンソロジー『新しい詩——二〇世紀英語詩の集成』*The New Poetry: An Anthology of Twentieth-Century Verse in English*<sup>xxxii</sup>をみてみよう。

当時、〈詩 (Poetry)〉は芸術史のなかでどう位置づけられ、〈詩〉の革新はどのように受けとめられていたのか。序の冒頭には、一三年、一四年の英米が〈詩のめざましいルネサンス期〉を迎えており、芸術に対する一般大衆の関心も並外れて復興している、と書かれる。そして、〈新しい詩〉についての説明がなされ、その経緯について次のように書かれた。

〈新しい詩〉は、一九九〇年代のフランス象徴主義やその後のパリの自由詩作者 (*vers-libristes*) に学んだものである。さらに、その幾つかはプロヴァンスの吟遊詩人の叙情に学んだものであり、また初期イタリアのソネット詩人やカンツォーネ作者のより精巧な構造を検討したものであり、また新しい視角からギリシアの詩を読みなおしたものである。しかし何にもまして最も重要なのが、〈新しい詩〉が東洋からの風に影響を受けているということである。(訳文、堀) <sup>xxxiii</sup>

ここでいう〈東洋からの風〉の代表詩人がタゴールや野口を指している。そしてモンローは、一九世紀の西洋世界におけ

る東洋の発見の影響について、特に〈日本〉からの影響に頁を費やした。日本美術からの影響の後に、詩歌からの影響があったことを詳述した。<sup>xxxiv</sup> 西洋の東洋への関心と研究が進むなかでオマル・ハイヤームのブームがあり、そのあとに〈発句 (*hokku*)〉の紹介によって日本の息吹が持ち込まれ、それをさらに進める形で中国古典詩への注目があつた、と述べられている。野口が尽力した〈俳句〉の翻訳紹介や詩作を通してもたらした刺激が、パウンドらのイマジズムの活動に先駆けるものであつたと捉えている。

では、モンローが評価する野口の英詩を、ここでは例として一篇だけ紹介してみる。(野口の英詩は、このような三行詩ばかりではないが。)

“I HAVE CAST THE WORLD”

I have cast the world, and think me as nothing.

Yet I feel cold on snow-falling day

And happy on flower day. <sup>xxxv</sup>

三行詩の俳句をイメージさせる作品である。これは *From the Eastern Sea* (1903) に初出した際には“LINES: from the Japanese”と題されていた<sup>xxxvi</sup>。じつは、この詩は、芭蕉の西行上人像讃の歌「すてはてて身はなきものと思へども雪ふる

日はさぶくこそあれ花のふる日はうかれこそすれ」を英詩にしたものであり<sup>xxxvii</sup>、“Lines: from the Japanese”との題は、芭蕉の歌からイメーჯされた一篇という意味であった<sup>xxxviii</sup>。誰の意向かは解らないが、ハリエット・モンローのアンソロジーに収録される際には、“I HAVE CAST THE WORLD”とタイトルが変えられている。

芭蕉の俳句に因んでいるからということではなく、野口の英詩作品として、この詩は多くの英語圏読者が注目し感銘をうけた作品であった。これは、アーサー・ランサムが、一九一〇年九月一〇日付の『フォートウナイトリ・レビュー』（ロンドン）の中でも取り上げていた一篇であり、野口の作品として当時有名だったものといえよう。またアメリカの女性詩人アデレイド・クラブシイ(1878-1914)の手帳の中に、この一篇が書き写されていたことも知られている<sup>xxxix</sup>。

この詩以外にも、野口の英詩はいくつかこのアンソロジーに含まれており、野口は俳句の紹介者としてだけ重要視されていたのではなく、詩歌の改革者、前衛詩人、現代を生きる詩人として評価を受けていたことがわかる。また、当時、ハリエット・モンローと野口米次郎は、頻繁に書簡のやり取りをしていた。<sup>x</sup>

#### 4 野口のシカゴ詩壇とホイットマンに対する評価

野口は若き日の一八九九年にもシカゴを訪問していたが、その二〇年後、一九一九年にもアメリカ各地での講演旅行中にシカゴを再訪して、一ヶ月間滞在していた。シカゴ到着の夜、さっそくモンローの家に夕食に招待されて、さまざま語り合っている。野口は彼女について、《新詩歌の傳導者を以て自認し且市俄高を以て米國新詩歌の發生の地たらしめた有力な文人の一人》<sup>xi</sup>と書いている。

シカゴ滞在中には、シカゴ大学の三〇名ほどの日本学専攻の学生と交流しており、とくにこの学生ら学生倶楽部が、シカゴで公演中の国際的オペラ歌手・三浦環(1884-1946)と野口米次郎のためのレセプションを開催してくれている。そのレセプションの夜は日本領事と共にでかけ、夜には領事館で晚餐の接待をうけている。そこにはシカゴ大学の教授たちの妻達も多く集まっていた。<sup>xii</sup>(野口は三浦環に対する評価と同情も大変面白いものがあるが、ここでは省略する。)

野口のシカゴに対する評価はどのようなものであったか。野口はシカゴが濃霧の多い都市でアメリカのなかで最もロンドンと似ていると語っていた。そして野口が最も敬服しているのはシカゴの美術館であった。とくにホイットスラーや浮世絵コレクションについてで、とくに浮世絵研究者のフレデリ

ック・グーキン(1853-1936)と親しく語り合う。グーキンは、シカゴの銀行界で、浮世絵蒐集家であった。グーキンは、一九二五年七月七日から日本を初訪問して、野口と再会している。(一九一九年のシカゴ滞在中には、朝日新聞にシカゴからの便り(記事)が四回掲載されている。

さて、シカゴを含むアメリカ講演旅行から帰国した後も、野口米次郎はシカゴの〈新しい詩〉の動きを日本で何度も開設していく。評論「米国文学論」(『中央公論』一九二五年四月初出)<sup>xviii</sup>で野口は、シカゴの詩の新潮流の重要性を述べ、ニューヨーク以上に文学上の重要な拠点都市がシカゴであると論じた。『市俄古と新しい詩、いな「中西部と米國の新詩」位興味のある文學問題はない』<sup>xix</sup>としたりうえて、ボストンに端を発するアメリカ文学の中心がシカゴに移っていく経緯を論じている<sup>xx</sup>。

特に注目すべきは、シカゴの新詩が『詩の根底は徹頭徹尾郷土に置かねばならない』と宣言し、その地域における『眞實な生活状態』をつくって『抱合一』<sup>xxi</sup>し、そこに住む者のみに適する『新句法と新慣用語を作り』<sup>xxii</sup>、『流動的文學の生命を表現』<sup>xxiii</sup>する必要を説く点である。ようするに、シカゴの〈新しい詩〉は地域性の重要性を求めていると、野口は理解しているのである。言い換えれば、グローバルとローカルの両輪によってこそ詩が発展できると考えているのであつ

た。<sup>xxiv</sup>

野口は、地域意識と世界意識は対立しないということ、『眞實に世界的といふことは眞實に國家的』<sup>xxv</sup>であり『實際に於て眞實に國家的であつて、始めて世界的となることが出来る』<sup>xxvi</sup>と述べる<sup>xxvii</sup>。國家的であること(ナショナル)や地域性(ローカル)を極めてこそ、世界的(グローバル)になることができる、と繰り返すのである。

そして、おそらく『ポエトリ』の宣言を訳したか解釈したものだと思われるが、次のようにシカゴ新詩の方向性について紹介している。

『我々の新しい詩は、所謂土着的音調を實現して、鐵道、新聞、活動寫真、通俗小説、流行歌、地方的祭禮或は博覽會、或は騒々しい我々の都會、有りとあらゆる實際的狀態を悉く我々新詩人の題材と取入れるであらう。』『我々は西へ西へと進んで、歐羅巴を全然見捨てねばならない、そして始めて我々は新文學を完成することが出来る』(中略)我々は公衆と共に歩き、何處までも公衆の必要を満たさねばならない。それは決して公衆に服従する意味で無く、公衆の心を以て我々の詩的心とする新解釋の上から來た結論であるに過ぎない。』この有力な宣言が、何處まで文學上に實證されたかを私は知らない。古い感傷的態度と信仰とを離れ始めて、新文學ここに起るといふ主張は、世

界を通じて同じであるが、何處の國が確實に完全に文學の新時代に入つてゐるかは明言されない。<sup>211</sup>

アメリカの詩が進んでいるとか遅れているという観点を野口は持っていない。英詩の新時代に、現在の日本の詩も同じ土俵にたつていっていると考へて、日本にいる自分との同時代性、相互影響性を感じるなかでシカゴの新しい詩の動きをみているのである。

また「公衆と共に歩き、何処までも公衆の必要を満たさねばならない」という詩人としての自覚は、この時点では民主主義的な視点によるシカゴの新詩の方向性を説明したものであるが、これはその後「地域性」の強調とともに戦時期の野口の路線に繋がつて行く予兆のように感じられる。

シカゴの「新しい詩」の宣言に戻れば、野口はこれを、ホイットマンから生み出されたものであると説いて、「世界を通じて、新しい詩はホヰトマンから出發して居る又ホヰトマンへ歸るとも見るゝことが出来る」といつている。そして「ホヰトマンの一大特徴は、完全に自分を宇宙心に結付け、個人格を全世界の流動的精神に融和させた点にある」と主張したのである。<sup>212</sup>

ホイットマンについては、新興国アメリカならではの天才詩人、原初的でエキセントリックな独特の詩人といった評価

は根強くあるだろう。だが、ホイットマンはフランス象徴主義に影響を与えた人物であり、フランス經由で英国でも評価を受けるようになり、その後の英米の思想や文芸にも多大な影響を及ぼした「世界文学」のひとつをつくつた人物といつてよい。<sup>213</sup>

野口は一八九六年のデビュー当初から、ホイットマンに大きな影響をうけていた英詩人である。彼の師ともいえる詩人ウォーキン・ミラー（1839-1913）が、ホイットマンを崇拜して自然生活をおこなつていたので、野口もその生活のなかでホイットマンの名前を知つたのである。いうまでもないが、ホイットマンの思想は、近現代の思潮や方法論に實際的な影響を及ぼした時代の潮流であり、若き野口はそれを日本人的感性あるいは野口独自の感性で受容していった。もちろん野口はホイットマンだけに心酔したというよりは、ホイットマン評価を中核にしてアメリカの近代思想——たとえばリンカーン、エマソン、ホイットマンなど——の総体を讚美している。

たとえば、ホイットマンの詩歌については、ネイティブアメリカンの名前を羅列した詩が面白いといい、ホイットマンの粗野、乱暴、プライドの強さといった面を指摘し興味を示していた。ホイットマンの地方性や「ネイション」の意識、民衆性・大衆性に注目していた。それは当時の大正期の日本

文壇においては、きわめて独特なホイットマン像であり、野口らしい異質なホイットマン認識であった。野口のホイットマン言説で最も多いのは、ホイットマンの「ヘユニティー (Unity)」の意識を支配している宇宙観であろう。野口はホイットマンの思想を、東洋の思想に重ねて次のように理解する。

私共東洋人は宇宙現象の連帯一致を信ずる。人間と自然との眞實な類縁を信ずる。私共が自然に入る時、個性の増殖を忘れて宇宙に於ける人生の立場を知るのである。私共は自然を默想する。それは自己の認識を重大視するからである。かういふ東洋人の文學的態度は、將來の米國人に外形的感傷主義から逃れる方法を教へるであらう。彼等に自然を了解する秘密を開かせるであらう。米國人の文化はここに於てか始めて花咲くであらう。そして見ると東西の融和はここ三四十十年の歳月を待たねばならない。-

アメリカで評価をされていた野口米次郎のホイットマン理解や解説は、当時の後輩詩人たちにも少なからぬ感化を与えていた。ホイットマンの翻訳は、日本では随分早くから行われていたが、とくに野口がアメリカ講演旅行にかけた一九一九年頃の大正期には、民衆詩派の勃興とともに、ホイットマンは最も重視された思想家となっていた。大正デモクラシ

の時代において、ホイットマンの研究は重要な思想的基盤となり、その東洋思想への志向や民主主義思想は、日本人にさまざまな形で共感と自覚と方法論を与えたのである。

たとえば、一九二二年に「詩歌の文化的任務」を連載で論じていた福士幸次郎や、一九二三年に「階級闘争と詩の位置」を連載する福田正夫など、みなホイットマンを中心にして、ホイットマンを称賛したカーペンターやトラウベルを高く持ち上げて評価して、地域を越えて世界人類に共通する思想と文化意識を説こうとしたのである<sup>5)</sup>。野口はホイットマンに対して独自の見解を語った人物で、また、その弟子トラウベルとの直接的交流を持っていたので、若い日本の民衆派詩人たちの中でも一歩前をゆく孤高の詩人として存在感を示していた。

## おわりに

パウンドらのイマジズム運動によってシカゴ詩学派を牽引した詩誌として知られてきた雑誌『ポエトリ』。その主催者ハリエット・モンローは、「新しい詩」運動における野口米次郎の先導的な役割を高く評価していた。英米詩における「東洋詩」受容の全体像を視野に入れ、新しいアメリカ発の世界

文学を模索していた。一九一〇年代の英米の詩人たちが『ポエトリ』のような革新をねらった詩雑誌の中で〈東洋〉の詩歌をどのように紹介し評価して、英詩の近代化に繋げようとしていたのか、そのなかで日本の野口米次郎はどのような評価をされているのかをみてきた。

二〇世紀転換期に「世界文学」やコスモポリタニズムを意識していたモダニズム芸術の中には、もともと《地方性・風土性》や伝統回帰を内包するものがあつた。二十一世紀の現代、「世界文学」という概念は、「地方」や「国家」という特殊性を超えて、いかに普遍性を得ていくかという点で新たな地点を切り拓こうとしているかのようにもみえる。

本稿では、俳句を中心とした日本文学に対する野口の言論活動が、シカゴという〈地方〉から発信する世界文学をめざすハリエット・モンローとどのように関与したか、そこにはホイットマンの思想の評価、民衆や地方性の評価という軸が重視されて、日本詩壇の側からも重視されていたことを明らかにした。

『J・W・ゲーテ（高木昌史編訳）『ゲーテと読む世界文学』青土社、二〇〇六年一〇月三十一日、二六六頁。  
同上、二六八頁。

iii ダムロッシュ（秋草俊一郎他、訳）『世界文学とは何か？』国書刊行会、二〇一一年四月一四日、一五・三四頁。

iv 同上、四二頁。

v 同上、四二頁。

vi “Japanese Literature”, *The New Encyclopaedia Britannica*, vol. 22, 15th edition, 1989.

vii フローレンツ「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」『帝国文学』、一八九五年三月、六・八頁。

viii 同前、一頁。

ix 前島志保氏は、アストン(1877)やチェンバレン(1880)の日本の短詩の発達に対する低い評価がその後も続いたことを論じている(前島志保『西洋俳句紹介前史—十九世紀西洋の日本文学関連文献における詩歌観—』前掲、三六・四〇頁)。

x 拙著『二重国籍』詩人 野口米次郎『名古屋大学出版会、二〇一二年二月二九日、二二一―二二三頁。

xi ハーヴァード大学の教授サンタヤナ(1863-1952)が、一九一一年『The Genteel Tradition in American Philosophy』という講演を行い、〈ジェンティール・トラディション〉という言葉を使った。つまり、アメリカの中上流階級の志向する文化意識が、イギリスの模倣でマンネリに陥り、価値体系や生活様式が形骸化し保守化していることを指摘した。〈ジェンティール・トラディション〉以後のアメリカの文学に関しては、Malcolm Cowley(ed.), *After the Genteel Tradition: American Writers 1910-1930* (Southern Illinois Univ. Press: 1964) や児玉実英『アメリカの詩』(英宝社、二〇〇五年)などが詳しく。

xii Harriet Monroe(1938), *A Poet's Life: Seventy Years in a Changing World*, New York: the Macmillan company, p. 251.

xiii まだ無名で若かったパウナムは、英国人らが模索していたこの英詩の改革運動を学び取り、アメリカの友人 H・D (1886-1961) とその夫となるイギリス人のリチャード・オールディントン(1892-1962)と共に、一九一二年に「イマジズム綱領」を作って理論化した。(イマジズム)、「イマジズム詩」(イマジスト詩人)と名付けて、H・D や自らの詩を文学運動の先端として、シカゴの新鋭雑誌『ポエトリ』に売り込んだのである。つまり、英国で興っていた英詩革新のムーブメントを米国の若者がいち早く理論化し、モダニズムの急先鋒であることを印象づけること



に成功した。しかも運動そのものが、まるで自らの発案であるかのよう  
にパウンドは自説を主張した。パウンドはロンドンからシカゴの『ボエ  
トリ』に数多くの論稿や詩篇を送って、自分が英国での新詩改革の中核  
にいることを表明した。

xiv 雑誌『リトル・レビュー』*The Little Review* (1914-1929)は多数の著  
明な文学者を輩出した前衛のリトルマガジンで、一九一四年三月にシカ  
ゴで創刊されたが、一九一七年からはニューヨークに拠点を移してパウ  
ンドの助力を得るようになる。創刊したのはマーガレット・アンドーソ  
ン (1886-1973)で、『リトル・レビュー』を創刊する前には、雑誌『ダイ  
アル』*The Dial*に關与し、一九一三年までは『シカゴ・イブニング・ポ  
スト』*Chicago Evening Post*の書評を書いていた人物でもある。

xv 『イングリッシュ・レビュー』(一九〇八年創刊)は、T・ハーディ  
やJ・コンラッドなどの当時すでに著名な作家をはじめ、D・H・ロー  
レンスやパウンド等の若手作家などの作品も掲載した雑誌で、野口は一九  
一七年二月、一九二四年八月に寄稿している(なお、B・ショウ、A・  
シモンズと並んで野口が寄稿した『The Skin Painter (From the  
Japanese)』(一九一七年二月号)は、谷崎潤一郎の「刺青」(一九一  
〇年一月『新思潮』発表)の翻訳であった)。

xvi これは『The Western School』と題されたエドガー・ジェブソン  
(1863-1938)の文章で、リンゼイ、マスターズ、フロストなどのシカゴ  
詩人たちを批判したものだ。これにパウンドが長い註釈を付けて、『リト  
ル・レビュー』に再掲載させた。

xvii このあたりの経緯については、ハリエット・モンロー自身の自伝 *A  
Poet's Life: Seventy Years in a Changing World* (New York:  
Macmillan, 1938)や、勝方恵子「リトル・マガジンとモダニズム文学II」  
『早稲田大学法学会人文論集』一九九五年、六一-八八頁)、伊達直之「ボ  
エトリ」誌の編集理念と詩論「パウンドとモンローの二つのアメリカ  
現代詩観」(『英文学(早稲田大学英文学会)』一九九八年三月、八八-一〇  
三頁)に詳しい。とくに伊達氏の論考では、パウンドとモンローの確執  
ではなく、類似性に注目しており、パウンドとモンローが「アメリカ」  
「ホイットマン」という共通する問題意識によって共闘していたことが  
論じられている。

xviii 野口米次郎「写象主義私見」『現代詩歌』、一九一八年三月、六頁。

xix Rabindranath Tagore, "Poems", *The Poetry*, vol. 1, no. 3, (1912, Dec),  
pp. 84-86.

xx [The appearance of the poems of Rabindranath Tagore, translated  
by himself from Bengali into English, is an event in the history of  
English poetry and of world poetry. I do not use these terms with the  
looseness of contemporary journalism. Questions of poetic art are  
serious, not to be touched upon lightly or in a spirit of bravura.]  
(Ezra Pound, "Tagore's Poems", *The Poetry*, vol. 1, no. 3, 1912, Dec,  
p. 92.)

xxi [The Bengali brings to us the pledge of a calm which we need  
overmuch in an age of steel and mechanics. It brings a quiet  
proclamation of the fellowship between man and the gods; between  
man and nature. (.....) There is a deeper calm and a deeper  
conviction in this eastern expression than we have yet  
attained.] (Ibid., pp. 93-94.)

xxii 一九一二年から一九一三年にかけてタゴールは英米各地で講演旅行  
を行っていた。蛭原徳夫氏の「解題」によると、ハーヴァード大学の連  
続講演をまとめたもの、とされている(蛭原徳夫「解題」『タゴール著  
作集』八巻、五四〇頁)が、我妻和男氏の「タゴール総年譜」はより詳  
しい。一九一二年五月二十四日、英国講演のためカルカッタを離れ、六月  
一六日にロンドンに到着。十月二十八日にニューヨークに渡り、イリノイ  
州に滞在してユニテリアン主催のクラブで初めて英語講演(六本)を行  
う。一九一三年一月、シカゴ大学で「古代インドの理想」について演説  
し、つづいてユニテリアンホールで「悪の問題」を演説。二月にニュー  
ヨークとボストン・ハーヴァード大学で講演。四月一四日にロンドンに  
帰る。五月一九日にキヤクストンホールで六つの講演をした。これらの  
講演が『サーダナ』としてまとめられた(我妻和男『タゴール著作集』  
別巻、八〇六-八〇七頁)。

xxiii A.C.H. "Review: Japanese Poetry", *The Poetry*, vol. 7, no. 2, 1915,  
Nov, pp. 89-97. (この中身は *The Spirit of Japanese Poetry* by Yone  
Noguchi と *Japanese Lyrics* by translated Lafcadio Hearn の記事であ  
る。フェノロサの *Epochs of Chinese and Japanese Art* の Zen poet の  
思想にも一部触れている。)

xxiv [Japanese poetry, because of its brevity, is sometimes considered

ephemeral and slight, even trivial—like those little Japanese gardens which the westerner appreciates as a toy, but whose deeper significance as a small mirror or reflection of nature is concealed from him.] (A.C.H., “Reviews: Japanese poetry: *The Spirit of Japanese Poetry* by Yone Noguchi, and *Japanese Lyrics* translated by Lafcadio Hearn”, *The Poetry*, 1915, Nov, p. 89.)

xxxv [Japanese poetry is never explanatory, its method is wholly suggestive; yet in its power to evoke associations, or to appeal to the imagination, it is profound rather than trivial. Brevity is occasioned by intensity. Nor is the effort of the Japanese *hokku* at all similar to that of the epigram as commonly conceived, which, like the serpent with its tail in its mouth, is a closed circle.] (A.C.H., “Reviews: Japanese Poetry”, *The Poetry*, 1915, Nov, pp. 89-90.)

xxxvi [Mr. Noguchi gives us many unintentional examples of the *hokku* in his way of expressing his thought; there is no dead phrasing.] (Ibid., p. 90.)

xxxvii [“This gentle Zen doctrine, which holds man and nature to be two parallel sets of characteristic forms between which perfect sympathy prevails.” We can then understand why, although we speak of Japanese poetry as suggestive, the word is not used, as in connection with certain French symbolist poets, to denote vagueness.] (Ibid., pp. 90-91.)

xxxviii [For the student of comparative poetry, Yone Noguchi's little book will serve as a key to a vast store-house of treasure.] (Ibid., p. 95.)

xxxix Eunice Tietjens, “Yone Noguchi”, *The Poetry*, vol. 15, 1919, Nov, p. 98.

xxx 一九一九年一月の“Hokku” 一九二六年八月の詩“Keepsake”の寄稿がある。

xxxii ビンナーとフィッケが野口を頼って来日した際には、新聞や文芸雑誌などにその動向が寄せられている。『新潮』(一九一七年五月)に掲載された写真には、野口の自宅で野口夫妻と、ビンナーやフィッケ夫妻らを囲んで、岩野泡鳴、高安月郊、生田葵山、川路柳虹、佐佐木信綱、戸川秋骨、加藤朝鳥、中田勝之助、柴田柴庵、片岡弥太郎が集まった。xxxiii この本は、(新しい詩)の方向性を示すものとして版を伸ばし、二

三年には増補版が出され、二四年、三二年にも再版された。リリでは、一七年版と二三年版を検討する。

xxxiii [They have studied the French symbolistes of the 'nineties, and the most recent Parisian vers-lyriques. Moreover, some of them have listened to the pure lyricism of the Provençal troubadours, have examined the more elaborate mechanism of early Italian sonneteers and canzonists, have read Greek poetry from a new angle of vision; and last, but perhaps most important of all, have bowed to winds from the East.] “Introduction”, Harriet Monroe & Alice C. Henderson (eds.), *The New Poetry: An Anthology of Twentieth-Century Verse in English*, 1924, p. xl.

xxxiv Ibid., pp. xl-xlii.

xxxv Ibid., p. 246.

xxxvi Yone Noguchi, *From the Eastern Sea*, 1903, Fuzanbo, p. 67.

xxxvii リの西行上人像讃「すつはつ」の歌に「つはつはつ」野口が「芭蕉俳句選評」(一九二六)や「西行論」(一九四六)の中や言及している。『芭蕉俳句選評』の中で、「東洋詩歌特に日本詩歌の最善のもの」をもちいたものは、「狂気の芸術心が自制的沈着に触れて平凡化したもの」。「芸術的勇氣が卒然静まって倦怠気分の仙境に入った表現」。「わだかまりがない放縦の言葉さへ使う」ことが出来る位に赤裸」なものであると論じる。そして、「すつはつ」が「これ正に人間を赤裸にした場合の真実な告白である。あらゆる人間的装飾と化粧を洗い落して、赤裸な原始性の上で生きた」芭蕉の静寂が歌われたものである」と論じた(野口米次郎『芭蕉俳句選評』第一書房、一九二六年)『野口米次郎選集—俳句和歌論』クレス出版、一九九八年、二二一-二二二頁)。

xxxviii 一九一〇年刊のシッセル・ケナレイ (NY) & ヴァレイ・プレス (鎌倉) の詩集 *From the Eastern Sea* では “Lines: From Basho” とリリタイルに書き換えられた(外山卯三郎「ヨネ・ノグチの十七字詩とその波紋」『ヨネ・ノグチ研究・三』(前掲、七五頁))。

xxxix クラブシイのメモについては、川並秀雄氏が「アデレイド・クラブシイとミシェル・ルボン—日本文学と関連して」(『大阪商業大学論集』一九六三年一月、二二二-二二五頁)の中で紹介している。ただし、川並氏が「クラブシイが野口の数々の詩から、特に芭蕉の西行上人像讃を選んだのは、「日本の真芸術」を理解したかどうかは、わからないが、静

寂な境地を汲みとつて、西行上人の心像に共鳴したからであろう」と論じていることには反論しておきたい。クラブシイは野口の〈英詩〉に共鳴したのであり、〈From the Japanese〉が芭蕉を意味することや、まして西行を賛辞する歌であったことを知っていたとは到底思えない。クラブシイの手帳への抜き書きは、野口の俳句的な英詩が、英詩壇や英詩人らに影響をもったということの証明にすぎない。また川並氏は、クラブシイはミシェル・ルボンの和歌のフランス語訳から影響を受けて〈五行詩を創案した〉とか、〈クラブシイくらい日本の短歌から影響を受けた東洋的な詩人はすくなくとも〉と論じているが、同時代的な短詩ブームや東洋詩歌ブームの時代風潮を想起すれば、これらの見解も限りなく論拠が薄い。

※ハリエット・モンローから野口への書簡で確認できるのは、関東大震災後の一通(419. Harriet Monroe to Yone Noguchi(1923, Dec. 13), *Yone Noguchi Collected English Letters*, pp.223-224.)だが、この一通の書簡をみても、いかに野口とモンローが頻繁に書簡のやりとりをしていたかが分かる。またモンローは、野口のシカゴ訪問時のことをよく考えるとか、シカゴを再訪して欲しいと書いている。この書簡には、彫刻家フアツギ(1885-1966)による野口の彫像が、野口がシカゴを訪問したときに制作されたことや、雑誌『ポエトリ』(一九二二年七月号)に、ジョン・フジタが *Seen and Unseen* と *The Selected Poems* の書評を掲載したことなどが書かれている。

※野口米次郎「冬の市俄高」『東京朝日新聞』一九一九年一月二五日朝刊四面。

※野口米次郎「三浦環夫人」『東京朝日新聞』一九一九年一月二六日朝刊四面。

※初出は『中央公論』一九二五年四月一日、のちに『米國文學論』一九二五年一月二日に収録。

xiv 野口米次郎『米國文學論』第一書房、一九二五年、二・三頁。

xv 同前、三頁。

xvi 同前、一七頁。

xvii 同前、三・四頁。

xviii 野口米次郎『米國文學論』、前掲、五、三八・三八、一二八頁。

xix ホイットマン文学がフランスに水脈し、またその後のヨーロッパ文壇に大きな影響を与えた。エリキラ氏は、アメリカという国独自のエキ

セントリックな天才といった従来からの根強いホイットマン評価に対して、ホイットマンの独自性やオリジナリティは、思想や芸術の、ある国際的な潮流を吸収し投影する能力に起因しているという説を唱え、ホイットマンの存在が、啓蒙主義、浪漫主義、実証主義、象徴主義などに連する国際的潮流に参画していたのみならず、ポスト象徴主義、未来派、キュービズム、シュールレアリズムなどのモダニストの精神を、直接的な刺激とはいえないにせよ予想させた」と論じている(Betsy Erkkila, *Walt Whitman Among the French: Poet and Myth*(1980; Princeton, Princeton University Press, p. 5).)

「野口米次郎『米國文學論』、前掲、三九頁。

「福士幸四郎「詩歌の文化的任務」『東京朝日新聞』一九二二年八月一五(一六日朝刊六面、福田正夫「階級闘争と詩の位置」『東京朝日新聞』一九二三年七月七日、他。

---

「研究科プロジェクト」成果報告書  
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科  
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四

---